

## 阿弥陀如来坐像

正法寺の法雲殿には、計り知れない光と生命の仏像である大きな阿弥陀如来像があります。阿弥陀如来は結跏趺坐で座り、穏やかな表情で描かれ、両手は胸の前で説法印を結んでいます。この像は鎌倉時代（1185～1333）に彫られたもので、国指定重要文化財に指定されています。

像自体の高さは 2.8 メートルで、檜でできています。阿弥陀如来の体はかつて漆に金箔で覆われ、衣は色鮮やかに塗られていました。光背（4.8m）には、13 体の小さな仏、巻き雲、その他の装飾要素が配されており、今なお少量の金箔が残っています。彫像には作者の署名はありませんが、その様式から研究者は、鎌倉時代の有名な彫刻家である快慶の作品である可能性があると示唆しています。

この阿弥陀如来像は、かつて長い間、神道と仏教を融合して信仰していた神仏習合の施設であった石清水八幡宮から残された、珍しい仏像の 1 つです。元々は石清水八幡宮の境内にあった八角堂と呼ばれる八角形の朱色のお堂に祀られていました。しかし、1868 年に明治政府が神仏分離を命じたとき、石清水八幡宮から仏教にまつわる物をすべて取り除く必要がありました。八角堂と阿弥陀如来像を救うために、正法寺の元住職が 1870 年にそれらを別の場所、つまり正法寺の近くにある古墳の上に移しました。2008 年に阿弥陀如来像は、その保護と保存を確実に行うために建てられた、正法寺の法雲殿に移されました。